●巻頭言

授業オンライン化の功罪

中京大学名誉教授・人工知能高等研究所 名誉所長
長谷川 純一

コロナの爆発的な感染をきっかけに、多くの大学でオンラインによる授業が急増した。その当時、コロナが終息すればまた元に戻るだろうという楽観的な観測もあったが、感染の波が繰り返される中でいまも完全には戻っていない。

コロナ前でも、研究活動の場ではオンラインの利用は普通に行われていた。遠く離れた研究者同士がテレビ会議で意見交換をするなどは日常の光景であった。急いでいるけれど会いに行く時間がない、旅費が足りないなど、理由はそれぞれであろうが、参加者の数が限られていればそれなりの効果が期待できた。オンラインに必要な装置やシステムも慣れればそれほど面倒ではないから、情報交換ツールの一つとして重宝した人も多かろう。

一方、教育の現場、とくに授業においてはどうであったか？２年半前、本学でそれまで対面で行われてきた授業のほぼすべてをオンラインで行うことが決まったとき、複数の教員から嘆きの声が聞こえてきた。「講義資料がオンラインに対応していない」、「対面でなければうまく説明できない」、「授業が一方通行になりがちだ」といった授業の質の低下を危惧するものから、オンラインシステムやビデオ会議ツールに不慣れなことを心配するものまでさまざまであった。授業のやり方や使用する教材などは教員ごとに違うし、周囲にオンライン授業の経験者も少なかったから、このような不満が出るのは当然だったかも知れない。もちろん、不満をあえて口にしなかった教員もいたであろうが、いずれにせよ、本学では短い準備期間をへてオンライン授業が全面的に始まったのである。その後もしばらくは、「オンラインはあくまで対面の補助であって代替にはならない」、「授業は対面が本筋だ」といった声を耳にした。

ところが、オンライン授業が１年、２年と続いたころ、オンラインに対する教員の考え方に変化が現れてきたことに気付いた。オンラインツールの操作に不慣れなことを心配する声はあまり聞かれなくなったし、コロナが終息しても、オンライン利用はなくならないと予想する教員も出てきたのである。そもそもオンラインには、リモート性、双方向性、マルチメディア性などの機能的な良さがある。これに、端末 PC のデータ処理・管理機能を加えれば、授業に必要な作業の大部分をオンライン上で行える。さらに、これらの機能をうまく使えば対面授業との併用もできる。オンライン授業に最初は難色を示していた教員もこのことに気付き始めたのであろう。筆者がオンラインの良さをもう一つ加えるとすれば、教員の授業に対する準備意識を高める効果ではないかと思っている。とくに講義資料は講義の要であるが、オンライン授業ではそれをもっと強く意識してもよいと思う。オンライン授業中に学生が見るものは、教員が話すシーンを除けばあとは教科書と画面に提示された講義資料しかないからである。講義資料には、教員が話す内容をより忠実・正確に反映させ、教員の話の流れに整合させ、学生があとで読ん

でも分かりやすいよう丁寧に記述した内容を載せることをもっと意識してもよい。この作業は教員には負担かも知れないが、学生のためだけでなく、教員自身がその授業全体を俯瞰する機会にもなろう。試しに筆者も実践してみたが、少なくとも学生の反応はよかった。

オンラインと対面のどちらにもそれぞれ利点・欠点があるから、それぞれの特質を活かしたハイブリッド授業を考えていくのは今後の自然な流れであろう。ネットワーク技術の進展で、オンラインでいろいろな作業ができる時代にはなったが、それでも、実空間と同じ感覚（臨場感や対面感）を得るにはVR/MR技術のさらなる開発が必要であろうし、もっと自然で違和感のない対話が可能になるにはAI技術やデータベース技術を援用した高いレベルでのコンテンツ提示が必要であろう。望むべくは、オンラインを意識しないオンラインの実現である。

＊　＊　＊

筆者は今年3月に退職し、現在は工学部の非常勤講師やIASAIの特任研究員としてキャンパスに出入りしています。また、この7月にはIASAI名誉所長の称号もいただきました。これからも研究プロジェクトなどに参加させてもらいながら、IASAIとの深いつながりを大切にしたいと思っています。